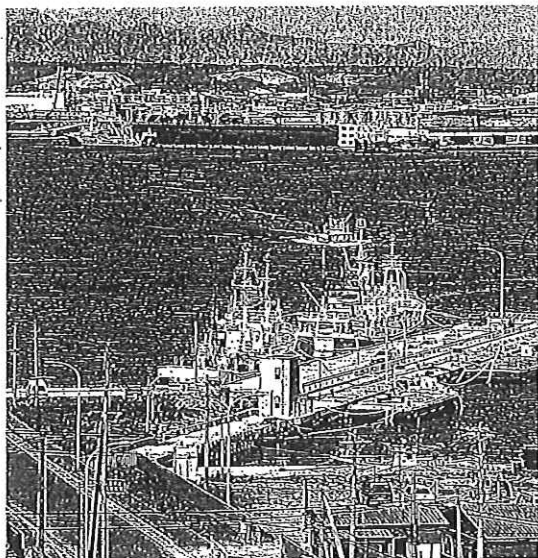


# 大楽毛物語

4



写真/入舟

## 現地釧路の状況を調査

明治16年6月29日、根室県令の湯地定基は、部下の赤壁次郎（後の釧路支庁長）と酒井紀明（後の鳥取村戸長）の2人を連れて、鳥取士族たちが移住するという釧路国の現地調査に向いた。鳥取の一族が釧路に来る一年前のことである。阿寒

川と海岸沿いの中間点がいいということである。阿寒川と海岸沿いの中間点がいいというので案内されたが、何たって人家は一軒もない草地。海岸に近づけば砂まじりの土だった。阿寒川は積年の氾濫がもたらした肥沃の地は、そう間違っていないはずだった。一望千里の草原で、柳の森が阿寒川沿いにこんもりと連なり、大楽毛に向かうほど

に大木がうつそうとした林となり、昼なお暗いほどであった。釧路村（明治33年釧路町、大正11年より釧路市）はまだ漁場で、釧路川左岸の丘陵に沿って、海浜には屋根石を並べた軒の低い家が30〜40軒建ち並び、現在の支庁坂下の辺りには虎杖の枯茎で垣をめぐした先住民の掘つ立て小屋が、ぼつぼつある程度だった。

## 淋しい道東の寒村釧路

港は、現在の入舟町で、釧路川にはもろなるん幣舞橋はなく、官設の渡船場があり、川を渡った右手は、一面の草原で、中には中戸川平太郎の家屋が、ただ一軒ぼつんと建っており、下手は昼間でも気味の悪い柳林で、人の姿が見えなくなるほどのヨシが密生していた。

釧路の漁業は鮭・鱒・昆布などが主産業で、春には数十人の漁夫が働いていたので、浜は少しにぎ

やかな活気をていしては、漁期が終り漁夫が帰ったトクケンシ海岸は漁場に残ったわずかの和人と先住民の淋しい海岸になるだけだった。そんな侘しい道東の果て地に、それも釧路川のはるか彼方の地に105戸、513人の人たちが突然やって来たものだから、お祭り騒ぎみたいな感じだ。阿寒川に向かって、目に写るのは雄阿寒、雌阿寒岳だったのに、煙が立ちこちに立ち上がるものだから嬉しい。

## 一気に活気阿寒川沿い

これまで年に2〜3回しか来なかつた汽船が、移住者のための米、味噌、塩を運ぶため、官の命令で月々回航するようになり、しかも移住者は日用品を買うため、釧路に出てくるから、昔からそこにいた住民は冬眠からさめたように活気が出てきた。一気に500人余も

の人口が増えれば、いかに明治時代とはいえ、人々の消費力が増えて、衣食住全般に、また子供の教育そして医療問題と経済効果抜群だ。人口20万を切った今の釧路市なら、よだれ？の出る人口増だったはずである。

## 総戸数100戸 513人の集落

鳥取県士族移住者の土地は「阿寒川西南岸」と決められ、第2次移住者は「大楽毛」方面を予定していたが「バラバラでは淋しい」と合わせて100戸の村となった。この時の50戸が計画通り大楽毛地区に移住していれば、現在の大楽毛はもつと違ったマチの発展が期待できたかも知れない。いづれにしろ最初の村落が形成されたのは明治18年の夏のことである。

（つづく）

北海道新聞

# (有)丹葉新聞店

釧路市大楽毛5丁目8の1

TEL:57-8228

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン

0120-464-104

または右記販売所へ